

\*\*\*\*\*

ヘン ガップ ライ サー フー ホイ

# Hen Gap Lai Xa PHU HOI

また会いましょう！ フーホイ村

\*\*\*\*\*

第10回(平成13年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書



出会い

ふれあい

in  
ベトナム



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

## はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
会長 安楽大  
(青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、今回で第10回目を迎え、ここに報告書「Hen gap lai Xa Phu hoi ヘン ガップ ライ サー フーホイ」(意味: また会いましょう! フーホイ村)を取りまとめました。

この事業は、青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根の国際協力を実践している隊員の活動を体験するとともに、訪問国の人々との交流を通して、国際交流、国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、祁答院町、溝辺町との共催で実施しました。各市町村から推薦された13名(中学生4名、高校生9名)と同行者6名(うちマスコミ2名)が、平成13年7月20日(金)~26日(木)、ベトナム社会主義共和国のホーチミン市とフーホイ村を訪問しました。

ベトナム社会主義共和国は、2000年にベトナム戦争終結から25年目を迎え、市場経済化、対外開放策を地道に進める「ドイモイ(刷新)」政策が行われています。今回訪問したベトナム最大の経済都市であるホーチミン市は、そうした活気に満ちた賑やかな都市です。ホームステイを体験したのは、ホーチミン市から北東に約70 km、ドンナイ省ノンチャック地区のフーホイ村。人口7,800人、ドリアンやランブータンなどのフルーツ生産も行われている農村です。村では、たくさんの笑顔が一行を迎え、暖かく包み込んでくれました。

ベトナム社会主義共和国には1995年から青年海外協力隊が派遣されるようになりました。今回の訪問では、活動現場訪問や交流会で11名の隊員の方々と会うことができました。水泳、テニス、バレーボールなどのスポーツ指導員、システムエンジニア、栄養士、助産婦など、さまざまな分野で活動していらっしゃる方々です。鹿児島県出身の山下美穂隊員(助産婦)も、ベトナム中部のフエから駆けつけてくださいました。隊員の方々との出会いを通して、国際協力やボランティアについて考え、学ぶことができました。

この事業に参加した中学生、高校生たちが、それぞれの貴重な体験を鹿児島のために、地球のために活かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々と新鮮な感動を共有することで、鹿児島の国際化に貢献できればと考えております。

最後にこの事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

# 目 次

◆ はじめに			
	鹿児島県国際協力体験事業実行委員会	会長	安楽 大
◆ ごあいさつ			
	鹿児島県総務部国際交流課長	六反 省一	1
◆ 出会い・ふれあい日誌			2
◆ 団員報告			
初めの一步	平 尾	彩	1 2
青少年国際協力体験事業に参加して	為 藤	弘 子	1 3
ベトナムが教えてくれたこと	水流添	秀 行	1 4
ボーダーレス・ボランティア	塩 入	里 美	1 5
私の見つけたもの	永 家	可奈子	1 6
ベトナムから学んだこと	山之内	真 恵	1 7
私のベトナム体験記	上 野	絵 莉	1 8
真心と愛情の国、ありがとう	菊 野	咲	1 9
ベトナムを訪れて	前 田	正 輝	2 0
語り尽くせぬ体験	千 竈	智 也	2 2
ベトナムでの私の思い出	坂 口	あゆみ	2 3
夢を見つけたベトナム	岩 元	明 子	2 4
青少年国際協力体験事業に参加して	今 村	圭 佑	2 5
◆ 第10回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて			
	団長	弓場 秋信	2 6
◆ 同行者一口メモ			2 7
◆ 事業関連の新聞記事			2 9
◆ 資料			
ベトナム概略図			3 8
事業概要			3 9
訪問団員名簿			4 0
訪問日程			4 1

# ご あ い さ つ

鹿児島県総務部国際交流課

課長 六 反 省 一

平成13年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のご成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、21世紀を担う青少年を、日本の国際協力の最前線を担う青年海外協力隊の活動現場に派遣し、実際にその活動を体験するとともに、訪問先国の皆さんと交流することによって、国際協力に対する理解を深めることを目的として全国でも先駆的に行われ、今回で第10回を迎えました。これまで100名を越える中学生・高校生が派遣されております。

今回は、初めてベトナム社会主義共和国を訪問され、青年海外協力隊の活動や、寺院訪問、スポーツ交流やホームステイなどを通じてベトナムの皆さんと交流され、国際交流や国際協力に対する理解を深めることができたと思います。事業終了後の出納長表敬の中で団員の皆さんのお話をお聞きしましたところ、文化や言語、生活習慣など、日本とは異なった環境の中で、苦しかったことや楽しかったことなど思い出深い貴重な体験をされ、たくましくなった皆さんを頼もしく感じました。

今回のこの貴重な体験を、皆さんの今後の人生や社会生活に活かしていただくとともに、ご家庭や学校、あるいは地域社会でお話をさせていただきたいと考えております。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会及びこの事業の実施にあたりご支援・ご協力を賜りました国際協力事業団並びに青年海外協力隊の皆様にご心から敬意を表しますとともに、この事業の今後一層の充実、ご発展を祈念いたします。

## 出会い・ふれあい日誌

### ● 6月23日(土)

#### 第1回事前研修(場所:国際交流プラザ)

JICAや青年海外協力隊の仕事,日本の国際協力等について学ぶ。また,ベトナム人留学生(ロイさん,ドンさん,ズンさん)を講師に迎え,初めてのベトナム語に挑戦。

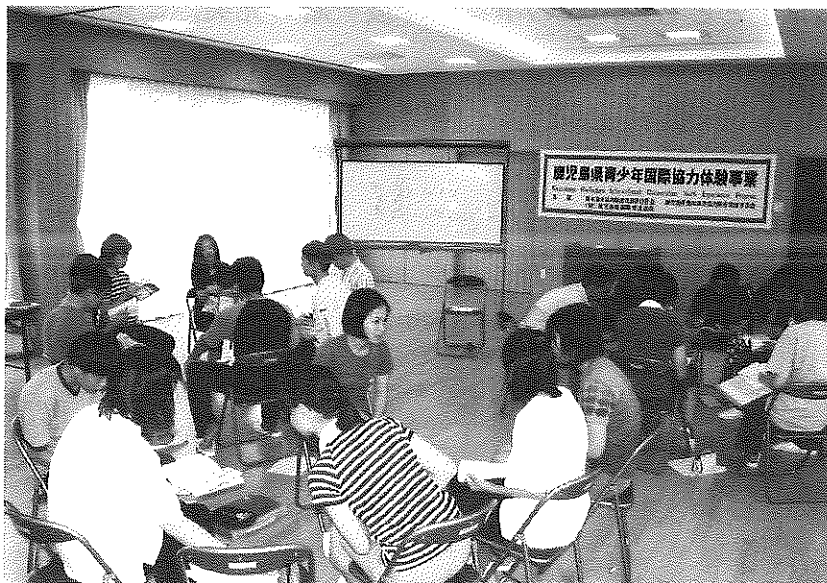


### ● 7月7日(土)~8日(日)

#### 第2回事前研修(場所:鹿児島県青年会館)

ベトナム人留学生を講師に迎え,ベトナム語のあいさつや指さし会話帳の使い方,ベトナム語の歌の練習を行う。また,現地の交流会で披露する出し物,おはら節の練習を行う。

楽しみながら,練習は夜遅くまで続いた。



● 7月20日（金）

結団式（鹿児島空港国内線ターミナル3階A室）

- ・ 激励（鹿児島県国際交流課課長補佐 西山 哲朗）  
（（財）鹿児島県国際交流協会専務理事 富迫 輝男）  
（鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会会長 安楽 大）

\*安楽会長のコメント…「気合」、「前向き」、「自然体」で行ってこい！

- ・ 団員あいさつ（1人ずつベトナム語の自己紹介をして、参加の動機と抱負を発表）



鹿児島空港発（関西国際空港経由）

時刻はほぼ予定通り。ベトナムへの期待と不安で少々興奮気味の団員たち。みんな仲良く元気。関空の税関では、検査官のいかめしい顔と厳しさに少々たじろぐ団員たち。

ホーチミン国際空港到着

みんなのテンションが高い。まず、空港の出口の人だかりに驚いた様子。自分たちが大勢に迎えられた気分?!

空港からホテルまでのバスの中は、驚きの声でいっぱい。街の様子を見よう、感じようと身を乗り出し、中村さん(現地コーディネーター)に「危険ですから、窓から顔を出さないように！」注意される始末。



ベトナムのバスの中で。  
(興奮気味の団員たち)



●7月21日(土)

ベトナム人民委員会歓迎セレモニー

Dong Nai(ドンナイ)省博物館正面広場で盛大に迎えられる。ブラスバンドの演奏と拍手の中を一行で歩き、博物館正面でストップ。そこへ対面に並んでいた青年団の制服を着た若者がこちらへ歩き出し、それぞれ一人ひとりに花束とリュックを贈る。この一人ひとりのネームプレートを持った若者たちこそ、今夜からお世話になる村のステイ先のホストシスター、ホストブラザーだ。

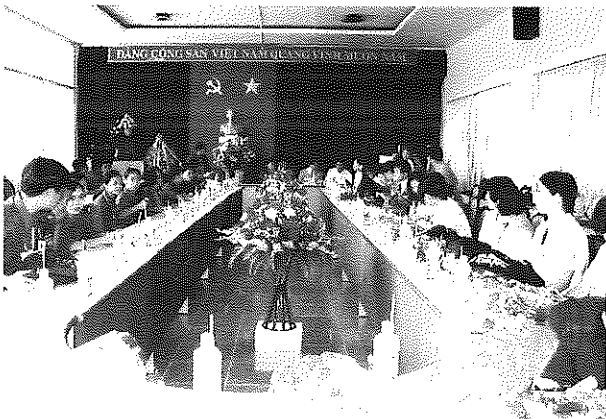
心のこもった歓迎に感動し、歌などでセレモニーは盛り上がった。

Dong Nai 省博物館見学

とても丁寧に説明をしてくれる案内役の方と一緒に広い館内を見学。省北部の豊かな自然や人々の暮らしの古代-近代-現代の移り変わりが、化石や発掘物、復元されたものや写真などで分かりやすく展示されており、自分たちの文化や自然を重視していることを感じる。団員はパートナーと一緒に歩きながら、さっそくの言葉の壁にぶつかり、ジレンマを感じている様子。

Nguyen Huu Canh(グエン フー カン)寺見学

300年ほど前に、ここ Dong Nai 省を築いた人と言われる Nguyen Huu Canh 氏を祭っている。団員たちは、だんだん馴染んできたパートナーや青年部の人たちと指さし会話帳を使って話したり、川のほとりで写真を撮ったり。



← 鼓笛隊に迎えられた後、歓迎セレモニー

パートナーといっしょに  
お線香をあげました →



← 少しづつ話はずんできました

## 人民委員会との昼食会

プレゼントの交換の後、それぞれの団長のあいさつ。青年部の団長のあいさつでは、日本の天照神のことなども話され、日本のことをいろいろ勉強していることがわかる。

あいさつや歌の間に次々に食べ物が運ばれる。甘いお米の揚げたもの、サラダ、鶏肉、パンに煮込みに野菜炒め…「ノンゾーイ(満腹)」を連発するが、笑顔でさらに進められる。おいしいのだが…



スクールの中、ベトナム料理を楽しみました

## Bien Hoa 市孤児院訪問

ここでもプレゼント交換で歌、出し物で歌、終わりもお別れも歌。日本人が支援しているという孤児院だけあって、「はとぼぼ」を歌っていた。小雨の中、院内を見学。子どもたちの生活する場や、教室などを見てまわる。

## ホストファミリーとの対面

やっと Phu Hoi 村に着いた時には、あいにくの雨。集会場の建物は狭く、全員が入れないのでそれぞれ迎えに来た家族により、一人一人大切にバイクに乗せられ、連れて行かれる。雨の中、バイクの相乗り慣れない団員を乗せたり、スーツケースなどの荷物を運んだり、家族の方たちや世話役の青年部の方たちも、嬉しくも大変な様子。

期待と不安でいっぱいの子供たちそれぞれの交流がいよいよ始まった。



子供たちが力いっぱい歓迎してくれました



団員たちからのささやかなプレゼント



●7月22日(日)

Phu Hoi 村での体験活動

それぞれの家庭で一日を過ごす。

朝の市場へ買い物、家の裏の果樹園でランブータンの収穫、タライで洗濯、お母さん、おばあちゃんと一緒にベトナム料理「揚げ春巻き」作り、ブンチャ（やしの実で作った保温器）、商売の氷運びの手伝い、泥んこの池に入ってハスの根（食用）取り、などなどそれぞれの家庭で団員が家族との交流をした。

体調不良を訴えた団員もいたが、ホストファミリーが心配し、熱心に看病してくれ、徐々に回復した。いろいろあったが、それぞれがホストファミリーの温かさを感じさせられた一日だった。

揚げ春巻き作りに挑戦



ブンチャ作りを見学

ホストファミリーと



●7月23日(月)

ホーチミン市戦争博物館見学

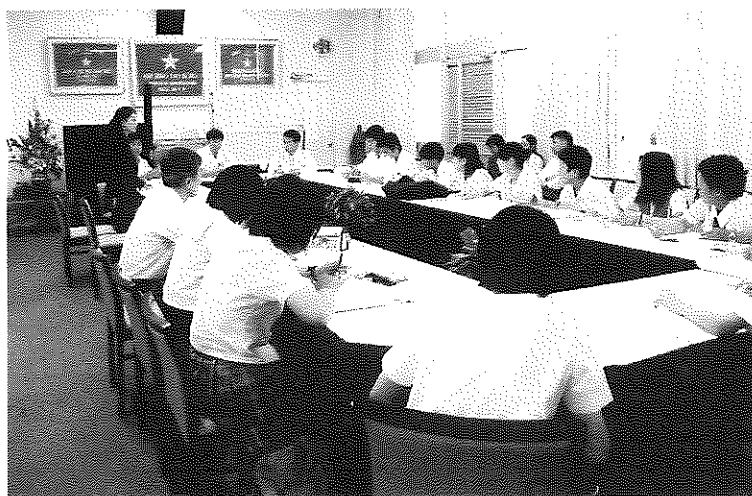
生々しくショッキングな展示物や写真、武器などを見ながら涙を流したり、気分を悪くしたりする団員たち。時間の都合で30分だけの見学だったが、もう少し時間をかけて、ベトナムの人たちが25年前に体験したことをショックを受けるだけでなく、理解することが必要だと感じる。

チョーライ病院訪問

ホーチミン市に堂々とそびえ立つチョーライ病院。日本からの資金援助で建てられた病院。JICA ベトナム事務所から来てくださった企画調査官の伊藤さんの案内で病院内を見学。2階の会議室でチョーライ病院の医師代表の方を囲んで質疑応答。次々にできる質問も時間切れで中断。CT スキャン室では団員の一人が実験台になり、写してもらった。



ベトナム戦争で使われた武器に絶句……



ベトナムの医療について熱心に勉強しました

●7月24日(火)

### Nhon Trach(ニョンチャック)高校訪問

校門から校舎に向かってズラリと並ぶ制服と白いアオザイの花道に迎えられ、校舎2階に準備された歓迎式の会場へ案内される。プレゼント交換、挨拶の後、お互いに出し物を披露した。楽しみにしていたスポーツ交流は、炎天下のバレーボール。汗びっしょりになりながらも、大張り切りでバレーをする者、応援する者。大いに盛り上がった交流会だった。

### マングローブ森遊覧

海水と淡水が交じるこの流域は、戦時中兵士達がマングローブの合間をぬって泳いだり潜ったりして身を隠しながら、ホーチミン市まで上がって行ったと言われている。

炎天下の船の上は暑く、団員も少々バテ気味。途中の島に上陸して昼食。村から持参したお弁当を食べる。昼食後は出し物の練習。合唱や合奏、ダンスの練習。腹痛を訴える者も。

### SAC 森林公園内戦地訪問、記念植樹

森林の入り口に建てられた立派な建物は、中に大きなホーチミン氏の銅像が祀られる戦争慰霊館。階段を上がると履物を脱ぎ、荷物は一切持ち込まず、戦没者の霊を慰めるべく2列に並び、線香をあげる。正面のホーチミン氏の銅像の両側には戦没者の名前がズラリと記されていた。

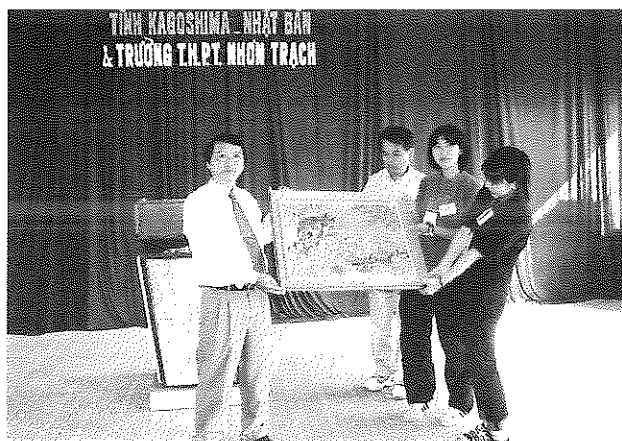
献花の後、建物裏側の庭で記念植樹。よい香りのする花が咲くという木を2本植える。

### キャンプファイヤー、お別れ会

午前中に訪問した **Nhon Trach** 高校の生徒約50人も合流して盛大なキャンプファイヤーとお別れ会。ダンスやゲーム、それぞれの出し物披露。

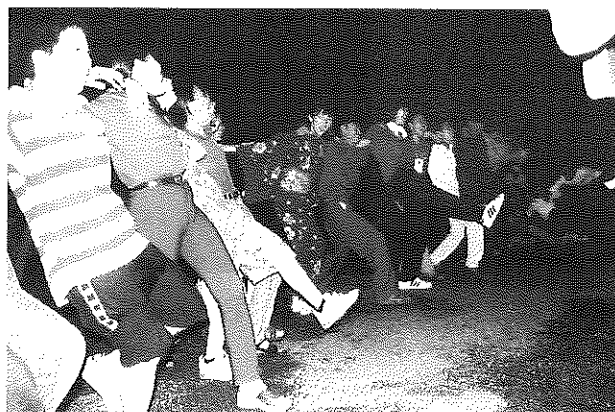
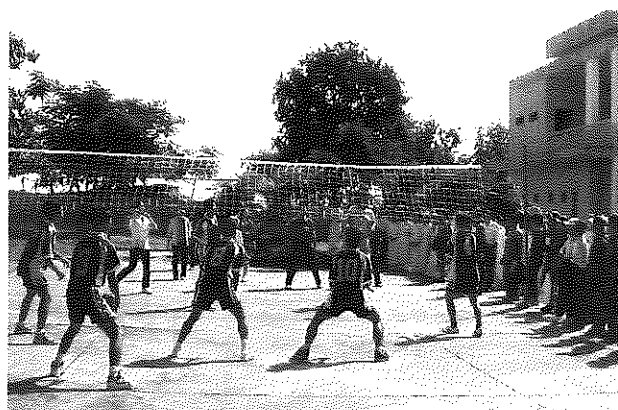
この日まで、時間を見つけては、みんなで、一人で必死に練習してきた団員。その甲斐あって、どれも素晴らしいものになった。

炎天下でのバレーボール頑張りました →



日本からのおみやげを進呈 ↑

ベトナムの友達と盛り上がりました →



●7月25日(水)

ホストファミリーとのお別れ

それぞれのホストファミリーに連れられて、集会所に集まる。みんな、たくさんのお土産を貰い、来たときより荷物が多い。

始めは元気に話していたが、誰かが泣き出すと、次々に涙なみだのお別れが始まった。バスに乗り込んでからも窓から手を握り合って離さなかったり…。手を振り続ける村の人たち、青年団の人たちを後に、出発。



ホーチミン市総合科学図書館視察

村にも一緒にホームステイした青年海外協力隊員の寺西順子隊員(システムエンジニア)の実際の活動を知るチャンス。再び伊藤企画調整員も来てくださった。

立派な建物に入る前に団員たちがびっくりしたのは入り口や庭の日陰に座っている人の数。本やノートを中心に持ち込めないの、みんな外で学習している。

広い館内で唯一クーラーのあるコンピューター室や、目の不自由な人のための点字図書の部屋、別館コンピューター室の点字に訳すソフトやプリンターには目を見張った。

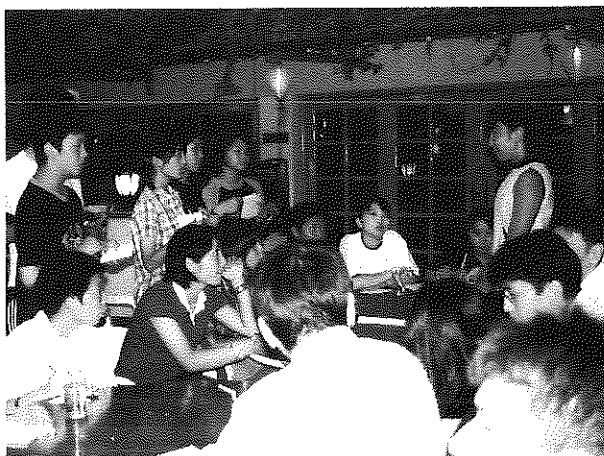


## 青年海外協力隊の隊員との懇談会，夕食会

ベトナムで実際活動している隊員、これから活動を始めようとする隊員合わせて11人が体験事業の団員のために集まってくれた。鹿屋市出身の山下美穂隊員は中部のフエからわざわざ駆けつけてきてくれました。

それぞれの自己紹介，活動内容，志望動機の発表の後，質疑応答。ここでも次々に質問が飛ぶ。特に同県出身で，助産婦という命に関わる仕事をしている山下隊員には，質問の嵐。一時間の懇談会を終え，場所を変えて夕食を取りながら懇談。団員と隊員が向かい合うように座り，最後のベトナム料理を食べながら，隊員のベトナム生活や活動，団員たちの村での体験など会話は盛り上がった。

飛行機の時間があるのでお開きとなり，団員が村でもらった、飛行機に持ち込めそうにもない果物を隊員の皆さんにプレゼントしてホーチミン市を後にした。



### <懇談会に出席して下さった隊員のみなさん>

- 山下美穂 (フエ市立病院 助産婦)
- 本部洋介 (Yet Kieu クラブ 水泳)
- 安藤康友 (ホーチミン市テニス連盟 テニス)
- 宇津野伸夫 (ホーチミン市テニス連盟 テニス)
- 小林雄一郎 (バレーボール連盟 バレーボール)
- 大竹啓造 (ホーチミン市卓球連盟 卓球)
- 寺西順子 (総合科学図書館 システムエンジニア)
- 舛田野子 (Yet Kieu クラブ シンクロ)
- 柿沼恵美子 (チョーライ病院 栄養士)
- 七五三靖子 (ホーチミン市体操協会 新体操)
- 井岡大和 (ヒントアン省スポーツ局 バスケット)

### ホーチミンー関空ー鹿児島

時間に押され、中村さん、Nhung（ニユン）さん、通訳の方たちにお礼とお別れの言葉を言って、大急ぎでチェックイン。全員が無事飛行機の座席に座ったのは、出発時間の2分前。

ベトナムでの緊張からの開放感からかすぐ眠りにつく団員、まだ興奮覚めやらぬ状態でしゃべり出す団員、それぞれの思いを抱えて夜の空へ飛び立つ。

翌朝（7月26日）6時半、関西国際空港に着き、伊丹空港経由で鹿児島へ。出迎えの家族や実行委員会の人たちの顔が見え、ほっとした様子。

空港にて解団式。



### ●7月31日(火)

#### 表敬訪問

県庁、南日本新聞、MBC に表敬訪問し、帰国の挨拶や、事業推進の協力に対する感謝の意を表す。

### ●8月25日(土)

#### 報告会

事業での体験を多くの方に伝えるため、溝辺町みそめ館において、報告会を開催した。報告会では、ベトナムで撮影したビデオを映しながら、団員の1人1人がそれぞれの体験を報告した。ベトナムに関するクイズを出し、正解の多かった参加者にベトナムのおみやげをプレゼントするなどして、会場は盛り上がった。



# 団員報告

## 初めの一步

平尾 彩

(鹿児島高等学校 3年)



来年に卒業を控え、私は進路のことで悩んでいた。将来デザイン関係の仕事に就きたいという漠然とした夢しか決まっていなかったからだ。一口にデザインといっても幅広く、衣装、建築、コンピューターといろいろだ。とにかく、物を生み出す仕事に携わっていきたくて思っていた。そう思い悩んでいた時、この体験事業のことを知り、すぐに申し込んだ。もともと国際協力に興味があったことと、歴史的に大きな傷を持ちながらも、なお独特の発展を遂げ続けるベトナム文化と、それを支えるベトナムの人々から受ける刺激を肌で感じることで、何か自分の進路のヒントになるのではないかと考えたからだ。

ベトナムでの一週間は、私に本当にいろいろな刺激を与え、学ばせ、驚かせ、そして考えさせてくれた。特に驚きは毎日のように起こった。それはただ、私が日本の文化を基本としてベトナムを見たから起こっていた驚きと、一人の人間として見た時の驚きと、二つのタイプに分かれた。

例えば、バイク乗用時のヘルメット着用の規制がないベトナムでは、一般道路でヘルメットを着用している人は非常に少ない。また、歩道の片隅に寝ている人もいる。それだけ、治安が良いのだろう。どちらも日本ではあまり考えられないが、それは日本の

常識であって、これもベトナムの文化なのだ。特に後者の方は、ベトナムだから、日本だからというより、人間としての信用の問題だと思う。ベトナムに行って、私は信用という言葉の意味は、相手を素直に受け入れることなのかもしれないと思った。

ホームステイの時、やっぱり最初はとても不安だった。でも、ホストファミリーの家に着いた瞬間、その不安はどこかに消えていった。外国人の私を家族の一員として、温かく受け入れてくれた。しかも、ホストファミリーだけでなく、親戚、近所の人まで集まってくれ、笑顔じゃなかった人は一人もいなかったのが、本当に嬉しかった。

毎日たくさんのお話をしたけれど、ほとんどが指さし会話帳とジェスチャーだった。よく、「心が通じ合っていれば、言葉の壁なんて…」といったセリフを聞いていたが、やっぱり言葉は重要だと、改めて学んだ。確かに、言葉が通じなくても、自分とその相手にお互いを理解しようとする心があれば、大体のことは通じるのだろう。でも、ホストファミリーとの別れの時、私の思いを伝えるにはジェスチャーには限界があり、彼らの気持ちを理解するには、私の知識では無理だった。すごく自分が情けなかった。悔しかった。

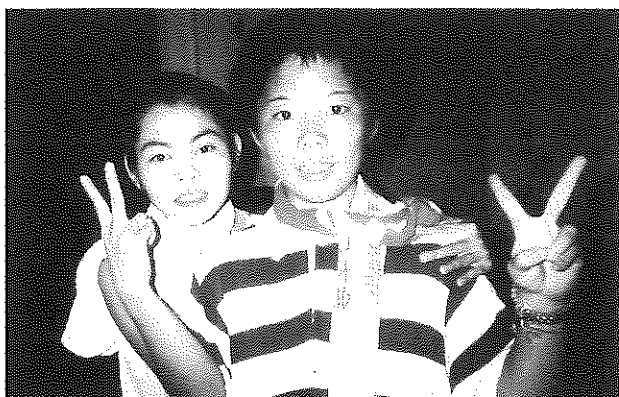
私が、今回の体験事業で感じたことは、国際協力とは口で言うほど簡単ではないが、考えているよりすごく身近にあるものだという事だ。自分の国以外の国に興味を持ち、その国の文化を認め、その国の人々と交流したいという気持ちが、国際協力の第一歩になるのだと思う。

この体験事業が、私の国際協力の道への初めの一步になったと言えるだろう。

## 青少年国際協力体験事業に参加して

為藤 弘子

(武岡台高等学校 2年)



青年海外協力隊の活動をこの目で見たかったこと、海外旅行に行ったことがないので、海外生活を体験してみたいと思ったこと、この2つの目的のために、私はこの事業に参加した。

初めての海外旅行のせいか、期待と不安でとても緊張したまま、ベトナム入りした。ベトナムは、とても暑いというイメージがあったが、日本のような蒸し暑さはなく、乾燥していてとても過ごしやすかった。ホテルに一泊して、ベトナム語の指さし会話帳と片言のベトナム語での4日間のホームステイが始まった。最初はとても不安だった。でも、家族がどんどん話しかけてきてくれるので、私の不安は少しずつなくなっていった。ベトナムでの生活で、いろいろな文化の違いを感じた。とにかく、親戚との結びつきが強く、毎晩親戚が集まり、いろいろなことを語っていった。また、ベトナムでは女性がよく働く。母親は朝早くから市場に働きに行き、夕方遅くに帰ってくる。母親が仕事で家にいないので、姉妹で朝昼晩の食事を作る。掃除、洗濯も分担してやっていた。女性が良く働くので、家の実権は、母親が握っている。

とにかくベトナムの人はやさしい。日本人が船から下りられずに困っていると、水の中にジャブジャブと入って、船から降りるのを助けてくれた。自分

が濡れるのも苦にしない。違いを感じた。

ベトナムの家は玄関がベランダぐらいの大きさでとても開放的である。人の出入りが自由に行われ、たくさんの人が家の中に入ってくる。そして、遊んだり、語ったりして帰って行く。日本と違い、近所との付き合いが強い。ベトナムでのすべてのことが初めてで、びっくりすることばかりだったが、別に不自由は感じなかった。ベトナムの生活は、とても楽しかった。

ベトナム最後の日に、青年海外協力隊の活動を視察した。ベトナムで、日本人はとても役に立っていると感じた。図書館の仕事をベトナム人と同等に行い、みんなの信頼があるのだと思った。夜の協力隊員との懇談会では、スポーツ部門の協力隊員が多く、話が参考になった。今ベトナムでは、これといって強いスポーツはない。しかし、今協力隊員の方々が教えている子どもたちが、将来オリンピック選手として活躍する予定だ。自分の育てた子どもたちがオリンピックの選手になるのは、とても名誉なことだし、やりがいのある仕事だと感じた。

今回私が協力隊員の話聞いてとても参考になったのは、言葉が通じなくてもスポーツを通して心が通じていれば、言葉の壁を越えてスポーツを教えることができるということだ。私は将来、体育の教師になりたいと思っている。しかし、大学卒業後すぐに先生になれたとしても、私は自分の人生を胸を張って話せるかと言ったら、話せる自信はない。だから私は自分に自信をつけるためにも、大学を卒業したら協力隊員として世界のために働きたいと思っている。しかし、今の自分は、人に頼りすぎているところがあるし、世界の共通語の英語を頑張る必要があると思う。まだまだ自分への課題は山積みだ。

今回この事業に参加してたくさんのことを学ん

だ。日本の豊かさ、ベトナム人の心の温かさ、自分の弱さなど数えきれない思い出と、もう少し自立す大切さを感じることができた。国際協力と口で言うのは簡単なことだが、いざ行動に移すのは大変なことだと思う。しかし、行動に移した人たちだって、たくさんいる。私は将来協力隊員として海外の子

もたちにスポーツの楽しさなどを教えたいと思っている。無理なことかもしれない。しかし、今回この体験を通して成長した私ならできると思う。そのためにも今自分の目の前にあるものを一つ一つクリアしていくことが大切だ。そして、将来自分の人生を胸を張って話せる人間になりたい。

## ベトナムが教えてくれたこと

### 水流添 秀行

(鹿児島玉龍高等学校 1年)



ベトナムに行く前は、ベトナムのイメージは、電気が通っていない、トイレが無い、家が汚い、水がないなど全然いいイメージは無かった。しかし、実際に行ってみると最初のイメージとは大分違った。場所や貧富の差にもよるが、電気も通っているし、トイレもあり(無いところもあったが)、水道は無かったが、飲み水は、確保されていた。やはり日本に比べるとインフラの整備はできていなかったり、電話などが無かったりと、無いものもたくさんあったが、僕は、それらのことは全く気にならなかった。むしろそれが自然のような気さえした。こんな感じで、僕は一週間でもかなりベトナムに染まったと思う。これから、そのベトナムでの初の異文化体験を書こうと思う。

僕はベトナムに行く時、健康面には全然不安は無かったが、言葉だけは不安だった。一応ベトナム語

を勉強したものの、一、二週間した程度だった。そんな不安を抱えて行ったベトナムだったが、やっぱり言葉が伝わらない場面がたくさんあった。英語も通じたが、実際に使うのは初めてだったので、言葉になっていなかったりした時もあった。しかし、ベトナムの人は、僕が何を言おうとしているのかを一生懸命考えてくれた。それに、よく話しかけてくれた。それを全部聞き取れなかったのが、悔しかった。今度行く時まで、もっとベトナム語や英語を勉強しようと思った。

ベトナムの人は、みんなフレンドリーだったので、すぐに仲良くなれた。ベトナムの人は、常に笑顔を絶やさない。ベトナムには今の日本に無いものがたくさんあると思った。そして、どこに行っても常に食べ物を出してくれた。どんな物がでるかと思っていたが、パンや麺、米など、結構日本と近いものだったが辛かった。果物がおいしかった。特にマンゴスチンは、今まで食べた果物の中で、一番おいしかった。今度行く時は、日本料理も紹介したい。

次に、青年海外協力隊の人との話について書きたいと思う。僕がこの事業に申し込んだのも、青年海外協力隊に興味があったからだ。僕は将来何になりたいか、はっきり決めてないけど、とにかく「人を助ける仕事」がしたいと思っている。だからこの青年海外協力隊の仕事には、すごく興味が

あった。今回は少ししか活動の様子を見ることができなかったが、多くの隊員から話を聞くことができた。どの方もいろんなことを考えていて、それに一生懸命取り組んでいるんだという気持ちが伝わってきた。僕も、どの分野でもいいからこの仕事をしてみたいと思った。

今回、この事業を通して、僕が得たものは、二つあった。一つは外国人に対する偏見だ。そんな気はないのだが、今まで僕は、外国人に対して何か偏見を持っていたが、それがなくなったのだ。

そして、どんなものも、頑張れば手が届くということだ。僕は今まで外国のことを自分には決して手の届かない世界のような気がしていた。しかし、自分でも届く世界だということが分かった。

まだあまり変わってはいない僕だが、これからの大きなプラスになっていくと思う。本当にこの事業に参加してよかったと思う。

Xin cam on Viet Nam. (ありがとう, ベトナム)

## ボーダーレス・ボランティア

塩入 里美

(出水高等学校 3年)



私たちは日本人である以前に地球人なのである。私は今回の青少年国際協力体験事業でベトナムに行き、このことを自分の肌で実感することが出来ました。

幼い子どもが靴磨き、幼い兄弟で果物を売ったりと、小さな子供たちから老婦までが生活をかけて働いている、生命力と活気に満ちた国ベトナム。私はこの国に、日本が忘れかけているたくさんのことを教えられました。ベトナムは日本に比べると生活水準も低く、経済状態もかなり悪い国です。しかし、人の心の豊かさ、温かさといったものは、ベトナム戦争があった国とは思えない程豊かなものでした。

その笑顔の中にいたせいか、滞在していた一週間、楽しく嬉しいといった気持ちが常に絶える事はありませんでした。

一方では現実逃避してしまいたいこともありました。それは、町の道路の隅に一人の血だらけの年老いた男性がうずくまっていた。しかし、周囲の人は彼を眼中にも入れず、素通りして行くのです。日本ではありえないことでした。また、私のホームステイした家には、知的障害をもった子がいました。私はホームステイをしているのにもかかわらず、彼の存在に半日ほど気付きませんでした。彼は私に見つからないように、身を潜めていたからでした。

彼は家族以外の人からは、家の奥で身を潜めている毎日でした。私もやっとのことで彼に心を開いてもらうことができ、外で一緒に木登りをしたり、歌を歌ったりと楽しい時間を過ごすことができました。しかし、来客があると彼はまた家の奥に身を潜め、楽しい時間も一時中断されるのです。客が来ては隠れ、客が来ては隠れと、こういう日常が当たり前になってしまった子、世間から孤立している子がベトナムにどのくらいいるのかと思うと、胸が苦し

くなりました。ベトナムの人にも人権はあるのに、どうしてここまで違うのか。みんな同じ人間なのに…。ここに挙げた話はほんの一例にすぎませんが、私は目を逸らしてしまいたい現実を自分の目でたくさん見てきました。だからこそ、世界にはこんな国があるということを一人でも多くの人に知ってもらい、自分を見つめ直してもらいたいです。

私は、今回の事業に参加したことで、自分の中の夢が大きく変化しました。『社会福祉士になって、いろんな人の社会復帰の手伝いをしたい。そして、養護教諭の免許も取って、将来、青年海外協力隊の

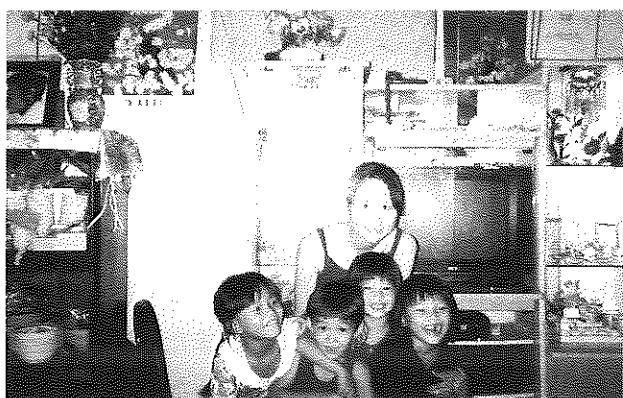
一員としていろんな場面で活躍したい』と考えるようになりました。さらに、『養護施設も建ててあげられたら…』とも思います。夢は大きく、道は長く険しいものですが、ベトナムの彼らの笑顔と活気が未だに忘れられません。このことが、今からの私を大きく支えてくれるに違いありません。

誰にだって、地球のためにできることがあるのです。どんなにちっぽけなことでも構いません。地球サイズで考えて、地球のために自分にできることを考えよう。

## 私の見つけたもの

永家 可奈子

(出水高等学校 2年)



私は、この青少年国際協力体験事業に参加して、青年海外協力隊員の方々に出会い、ホストファミリーに出会い、何よりベトナムという国に出会えて自らの価値観が変化し、世界観が大きく広がった。ここで、私が一週間という短い期間の中で自分のアンテナを大きく広げ、フル回転の末にキャッチしたいような発見を紹介しようと思う。

まず一つ目に「国際協力とは貧しい国を助けるのではなく、現地の人々と共に地球を育てることだ」ということである。私はこの事業に参加する以前は、国際協力についてあまりに知らなさすぎたと思う。先進国の人々が貧しい国の人々を無償で手助けす

るというような浅い考えしか持っていなかったのが、正直なところだ。しかし、青年海外協力隊の活動現場を見学し、懇談する中で、協力隊の隊員も現地では多くの人に助けられながら、共に活動していることを知り、地球を共に育てるという言葉がピッタリ当てはまると痛感した。しかし、悲しいことに現在までに青年海外協力隊が派遣された国で活動によって国は大きく成長し、自立できるようになり協力隊が引き上げた例がまだ無いのである。21世紀には協力隊の活動や色々なボランティアによって自立できる国を1つでも多くしていければなあと思った。そのための第一歩としては、各国とも社会主義や資本主義といった考え方の違う国を理解し、認めていく姿勢が必要であると私は感じた。

二つ目に「ベトナムは大きく、強く、暖かい国である」ということだ。今回4日間のホームステイ期間中、私はベトナム人女性の働きぶり、活躍ぶりに驚き、尊敬した。お母さんは毎朝早く起き、仕入れに出かけ帰ってくると食事の支度をしていた。それを子供たちも手伝っているのだ。現在の日本では多く見られない光景だと思う。また、私を客人として

接するのではなく、家族の一員として接してくれ、いろいろな仕事を任せてくれた。今の日本人に、はたしてこれだけのことができるだろうか。核家族化が進み、隣近所との付き合いも乏しい現代の日本人にはできないと思う。これらの発見は私の感じたごく一部のことにすぎない。まだまだ多くの発見があったことは言うまでもない。

そして、私はこの一週間の中で将来に続けていきたいというものが多くあった。私は以前は教育関係

の仕事に就きたいと思ってはいたものの、具体的には何も考えてはいなかった。今回のことで青年海外協力隊の隊員として世界の子供たちと出会い、いろいろな教育を見に行き、21世紀の教育のあり方を自身で見つけに行きたいと思えるようになった。今の私には私を温かく応援してくれる人たちと叶えたい夢がある。この二つを翼に変えて、未来と夢に向かって飛びたつ日が必ずくることを私は信じ、これからも努力していこうと思う。

## ベトナムから学んだこと

山之内 真恵

(出水高等学校 1年)



「マス・メディアを通して得た知識だけでは、本当のことは何も分からない。」今回私がベトナムでホームステイをして、一番強く感じたのはこのことだった。出発前、テレビや新聞、その他の情報を通して、私がベトナムに対して抱いていたイメージはあまりいいものではなかった。それは家族や友達も同じで、「まだ地雷が埋まっているのではないか」「感染症にかかりはしないか」など、多少なりとも偏見の目で見ている部分があったように思う。

しかし、実際ベトナムへ行き、現地の人々と一週間過ごしてみて、出発前に想像していたところと全く違うことにとても驚いた。開発途上国なので、生

活水準も低く、暮らしにくい国だとばかり思っていたが、何一つ不自由することはなかった。むしろ、物がありすぎる日本よりも、充実した生活を送っているように思えた。

そして、そんな暮らしの中から学ぶことも多かった。情報通信技術が急速に発展し、どんどん便利になっていく日本で、薄れかけてきている「人と人のつながり」が、ベトナムの日常には大きく存在していた。毎日のように近所の人や親戚などが家を訪れ、一緒に食事をしたりした。そして、訪れた人たち誰もが、笑顔で私に接してくれ、受け入れてくれた。私はこんなベトナムの人々の明るさと優しさに支えられながら、全くの異文化の中で言葉の壁を乗り越えて、心と心のコミュニケーションをとることができたのである。

私のホストファミリーは、父、母、娘二人の4人家族であった。お父さんはよく私をバイクの後ろに乗せて、いろいろな所へ連れて行ってくれた。ときには娘二人も一緒に、バイクに四人乗りして出かけることもあった。お母さんはとても働き者で、私が朝の5時に目を覚ますと、もう仕事に出かけた後だった。そして、二人の姉妹は私の気持ちを一番理解



してくれた。何も分からなくて不安でいっぱいの人に、いろいろなことを教えてくれ、外を歩くときには、必ず私の手をしっかりと握って歩いてくれた。別れの前日に、二人の姉妹は、「私たちとあなたは姉妹です。私たちは家族です。」と言ってくれた。私はこの言葉にとても感動した。日本人は、これほどまでに他人のことを気遣うことができるだろうか。たった一週間一緒にいただけの人に、家族同然の気持ちを持って接することができるだろうか。人を思いやる心、受け入れる心、そんな大きな心を持つ人がたくさんいるということが、ベトナムの一番の魅力だと思う。そして、そんな素晴らしい人々との出会いが、私の内面をとても豊かなものにしてくれたような気がする。

ベトナム最後の夜、私達は青年海外協力隊員との懇談会に出席した。スポーツや医療関係で協力活動を行っている協力隊の方々は、仕事内容や協力隊に

なろうと思ったきっかけなどを話してくださった。どの分野においても、その仕事内容は大変なものであったが、協力隊の方々は、皆、生き生きとしていた。私はそんな協力隊の方々との交流を通して、自分も将来は青年海外協力隊員になり、医療の面で人々の役に立ちたいと強く思った。

今、世界中で国際協力への関心が求められているが、まず第一に、私は他国のことをもっと知るべきだと思う。ベトナムをはじめ、多くの「開発途上国」と呼ばれる国々が、私たちの持っているイメージと大きく違うということを皆に知って欲しい。「国際協力」というと、ただ与えるだけのようだが、実際は学ばされることも多くある。互いを知り、受け入れ、高め合う。そんな関係の世界を築いていきたいと私は思う。

## 私のベトナム体験記

上野 絵莉

(加世田常潤高等学校 2年)



私は7月20日から26日まで鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加しました。

参加した理由は、日本で学んだり経験できないことを体験したかったのと、高校に入学してから本格

的に学んでいる食物・被服をベトナムでも学んでみたかったからです。

一日目は、結団式の後、鹿児島、関西空港と飛行機を乗り継ぎ、ホーチミンに到着しました。

私は結団式が終わるまでは不安ですごく心配でしたが、終わる頃には「ベトナム」への期待で胸がいっぱいになり、早く行きたいなあという気持ちになりました。そして「ベトナム」に着いて、その第一印象は、「ベトナム」には人を釘付けにするものがあるからこちらにあって、カメラでは写しきれないほどのいいものがたくさんあふれていると思いました。

二日目は、ベトナム人民委員会歓迎セレモニーがあり、この時ホストファミリーと対面し、その後のDong Nai (ドンナイ) 省博物館見学、Nguyen Huu Chnh(グエン フー カン)寺訪問、Rose Garden

内釣堀で魚釣り、Bien Hoa(ビエン ホア)市孤児院訪問、Bien Hoa 市工業団地見学等と一緒にきました。最初、ホストファミリーと対面した頃は、四日間のホームステイを上手くやっていたかすごく心配だったけど、だんだん打ち解けていくうちに、自分なりに頑張ってみようと思いました。三日目は朝、礼拝堂に行き、朝食のあとは、バイクで別のホストファミリーのところに行き、おしゃべりをしたり、買い物に行ったりして、とても楽しく有意義な一日でした。

四日目は日本人だけでチョーライ病院と戦争博物館に行きました。チョーライ病院は、日本の援助で整備が進められたと知って、改めて日本ってすごいんだなと思いました。戦争博物館には、ベトナム戦争時の写真等が展示してありましたが、中には残酷な写真も多くあり、見ていられない程でした。私はこれを見て、目を背けないでちゃんと受け止めなければならない事実だと思いました。

五日目はいよいよホームステイ最後の日です。この日はNhon Trach (ニョン チャック) 高校を訪問してスポーツ交流をしました。次に船でエビを養

殖している人の家に行って、エビをご馳走になり、その後は SAC 森林公園内戦地を訪問して、記念植樹をしました。そして、夕食を食べた後にお別れパーティーに出席しました。皆で踊ったり歌ったりしてすごく楽しくて、明日帰るなんて信じられませんでした。

六日目、ついにホストファミリーとのお別れの日が来ました。涙、涙の別れでした。みんなへ「Hen Gap lai (ヘン ガップ ライ) (また会いましょう)」と言って別れました。またいつか絶対行きたいと思います。

次はホーチミン市総合科学図書館視察、協力隊員との懇談会がありました。私は、協力隊の方々のお話を聞いて、いつか私も協力隊員になりたいなと思いました。

わたしはこの事業に参加して、日本にいたら経験できない多くのことを経験しました。これからの私の人生において、たくさんのプラスになる経験をしました。

またこのような機会があったら、ぜひ参加したいです。

## 真心と愛情の国、ありがとう

菊野 咲

(国分南中学校 2年)



「あー後4日でベトナムかぁ。」私の中でベトナム出発の日が近づくにつれて、複雑な思いが増えていきました。行けることになって嬉しいけど、上手くやっていたかどうか…。期待と不安が一日毎に揺れ動き、「大丈夫、心配ない。何事も挑戦だ。」と強気になったかと思うと、次の日には「どうしよう。本当に大丈夫かなぁ。」とすごく弱気でした。こんな風にアンバランスな気持ちのまま、ベトナム出発の日を迎えました。

飛行機から見たベトナムの地は、私の予想と違い川が茶色く濁っていました。そして、道路にはバイクがとても多く、ほとんどの人がヘルメットなしで、

しかも一台のバイクに複数で乗って当たり前といった様子にはビックリしました。

いよいよホームステイです。私のホストファミリーは七人家族で、皆とても優しくお世話してくれました。一通り荷物の整理を終えると、お風呂に案内してもらいました。お風呂を見た瞬間、「絶対無理。入れない。」と思いました。我が家とはあまりにも様式が違うのです。結局その日は、洋服を着たまま髪を洗うだけしかできませんでした。トイレを見た時も驚きました。こうして、初日はホームステイ先の家の習慣についていけず、言葉もうまく通じず、正直帰りたいと思いました。

7月24日、高校を訪問しました。そこで私が出し物をするのが、急に決まりました。間違えたらどうしようと少し不安だったけど、日本の文化を伝え、ベトナムの文化を知る、それが私がベトナムへ行く主なきっかけだったので頑張りました。踊っている最中はすごく緊張しました。日本では舞台上でもそこまで緊張しないのに、少し足が震えていました。一箇所間違えてしまったけど、満足感でいっぱいでした。日本の文化の一つ、日舞をベトナムの方々に見せることができ嬉しかったです。

また、戦争博物館は、ベトナム戦争の悲惨な過去を見せられました。かわいそうで目を覆いたくなるような写真の山でしたが、現実から目をそらしては

いけないと思い、一枚一枚しっかり見て回りました。途中で、お金の入っている入れ物があり、なんだろうと思いました。そしたらそれは、戦争の被害を今だに引きずって苦しんでいる人々を救うための募金入れでした。私にとって戦争とは遠い過去のことと思っていたのに、実際はそうではなく、今だに苦しんでいる人たちがいるという現実を目の当たりにして「私達は絶対二度と戦争という過ちは犯してはならない」と強く感じました。

お別れの頃には、ホストファミリーともすっかり仲良くなれ、せめてもう一日だけでもいいので残りたいとホストの姉妹と泣きました。すべて、皆のやさしさと真心のおかげで、たった五日間の出会いで国も違う言葉も違う人々がお互いを思い、涙を流し合っていることは、本当にすごいことだと思います。

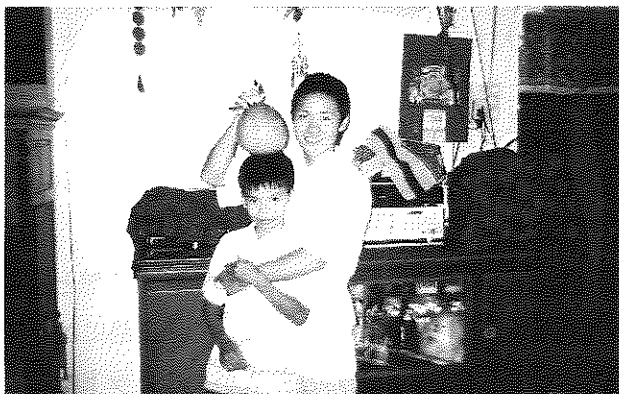
私にとってベトナムは第二の故郷となりました。優しさと真心であふれたベトナムで私はたくさんの事を学び、成長できました。それと同時に関わってくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、またこのようなチャンスがあったら、どんどん挑戦して、成長の扉を開いていきたいと思っています。

## ベトナムを訪れて

前田 正輝

(鹿屋農業高等学校 1年)



出発の日が来た。少しの自信と大きな不安を胸に七月二十日、ベトナムへ向け飛び立った。ベトナムに着くと、さっそく歓迎セレモニーが行われ、ホストブラザーとの対面式があった。僕のホストブラザーは、笑顔で出迎えてくれ、昔から友達だったかのように親しげに肩を組んでくれた。

バスの中で、事前研修で一生懸命覚えたベトナム語で話したり、会話帳を指差して会話したりしよう

としたが、ほとんど伝わらなかった。ほかの友達も悪戦苦闘しているようだった。

今回のこの事業への僕の参加理由は、青年海外協力隊員の活動を実際に体験し、隊員の皆さんがどんな思いで活動しているのか触れてみたかったからだ。また、僕の家では、よく外国の人を招き交流をしている。でも、僕自身は日本を出た経験が少ない。国際交流は、相互交流でなければ、対等の交流ではないと日頃感じている。だから、今回の機会を利用し、日本を訪れる外国の人々の気持ちを味わい、東南アジアの国「ベトナム」を知り、この国の人に触れ合い、心の交流ができればと思った。

歓迎セレモニーを終え、ベトナムのフーホイ村に着くと、それぞれホストファミリーの家に向かった。僕のベトナムでの家族は、一つ年上のトゥアン君、お父さん、お母さんなどの五人だった。家に着くと近くからたくさんのお客の人が集まって来て少しびっくりした。自己紹介をすると、みんなが矢継ぎ早に、しかもベトナム語で質問してくるため、何を聞かれているのかが分からず大変だった。夕食の後、トゥアン君が「バイクに乗れ」とジェスチャーするので、後ろに乗ると同じ団員の岩元明子さんの滞する家に連れて行ってくれた。そこには、鹿児島のお客も五人集まってきていた。「大丈夫?」「話し通じる?」「これから四日間生きていけるかな?」など、互いに不安な気持ちを吐き出すと、これまでであった緊張と不安が少し軽くなっていった。

次の日、ベトナムのお母さんから大きな絵と指輪のプレゼントがあった。お母さんからもらった指輪には、「ベトナムに滞在中は自分の子供として見る。」という意味があるとのことで、何か心に温かいものを感じる事だった。その日、近くの蓮畑で収穫体験をした。今村君と通訳の方と一緒にいき、上半身裸で田んぼに入った。初めての体験だったが、途中で泥んこ合戦になり、二人とも泥だらけになった。

また、現地の高校も訪問した。ここでは、ベトナムの民俗舞踊を見せてもらった。僕たちは、日本の歌や日舞などを披露した。また、バレーボールの親善試合もした。スポーツを通じた交流は、言葉が必

要ないので、楽しく気軽にできた。夕方はキャンプファイアーをした。みんなで火を囲み、踊ったり、歌ったりする活動を通し、心には国境がないことを感じた。

一番印象深かったのは、ホストファミリーとの別れだった。その日の朝は、いつもと変わらず、お父さんやお母さんと話をした。ベトナムに来てもう四日も経っていたため、大体何を伝えたいのか何となく分かるようになっていた。

制服に着がえ、ついに別れの時がきた。家族との別れは辛かったが、走り始めたお父さんのバイクの上から、涙を見せないよう笑顔で「また会いましょう」とベトナム語で叫んだ。集合場所に着くとみんなも泣いていた。バスに乗り、トゥアン君に最後の別れをし、フーホイ村を後にした。

最終日、青年海外協力隊の隊員たちとの懇談会があり、その席でいろいろなことを聞くことができた。仕事のこと、参加の動機や現在の気持ちなど。様々な質問をしたが、僕たちと変わらないなあと感じることだった。それまでは、青年海外協力隊に参加するにはいろいろな制約や条件があり、僕たちのような一般の者には無理だろうと思っていた。でも、実際には、何か人のために役立ちたいという情熱と国際貢献の思いがあれば、誰でも参加できるのだと感じることだった。

僕は、今回のベトナム訪問を振り返り、自分が様々な面で大きく成長し、いろいろな物を広く見る目を養えたように思える。また、自分さえ・日本さえよければと言う思いから、自分だけではなくみんなが、日本だけではなく世界中が、もっとよくなればと思うようになった。

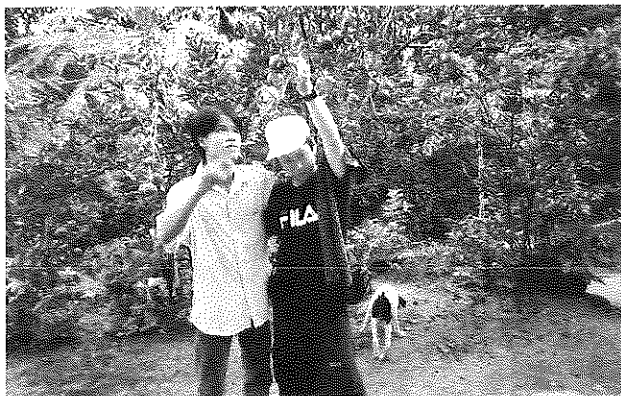
今、僕は、友達やたくさんの人に今回感じたことや思ったこと、多くの経験を伝えたいと思う。そうすることが、僕の役割だと思っている。そして、将来は青年海外協力隊の一員として、参加したいと思っている。どこでもいいから、誰かのために役立ちたいと思っている。

今回、ベトナムに行き、本当に良かった。大きくて、そして、新しい世界を僕に広げてくれた旅だった。

## 語り尽くせぬ体験

千竈 智也

(祁答院中学校 3年)



「いい国だ。また行きたい」

これが日本に帰ってきた時のぼくのベトナムに対する感想でした。まだ他にも感じたことはたくさんあったけれど、一番思ったことは「いい国だ。また行きたい」でした。

しかし、初めベトナムに行くと言ったとき、家族や友達は「えっ、あんなところに。」「地雷踏むなよ。」とあまりいいイメージを持っていないようでした。ぼく自身、あまりベトナムのことを知りませんでした。出発前には二回ベトナム語などの研修がありました。ベトナム語は発音が中国語に似ていて難しく、ベトナムに行って通じるのか、とても不安でした。出発までずっとベトナムはどんな国だろう、言葉は通じるのか、と不安ばかりでした。

とうとう出発当日。飛行機に乗り、ベトナムへ行きました。飛行機からベトナム・ホーチミンの街並みが見えたときの印象としては、「とんでもない所へ来てしまった。」ということを感じたのを覚えています。川が茶色く見えるのは、土ばかりだったような気がします。飛行機を降りた時は蒸し暑いと感じました。空港を一步出たら、そこにはどこの国のか分からない言葉で書かれたボードを持って人を探すベトナム人があふれていました。周りの人のし

ゃべる言葉も全く理解できませんでした。

二日目に博物館で歓迎式などがあり、一緒にホームステイするお兄さんとの対面式もありました。出発前にホストファミリーの写真はもらっていましたが、写真にはお母さんしかいなくて、その話を聞くまで相手が誰だったのかさっぱり分かりませんでした。夜、ホストファミリーとの対面でした。家に連れて行ってもらうと、たくさんの方がいました。初めの日にはきちんと自己紹介をしようと思っていたのに、緊張してなかなか勉強したことが出てこなかった。でも、英語で話しかけてくれたりして、なんとか会話ができ、安心した。

二日目からは、いろんな所へ連れて行ってもらい、バイクの後ろにも初めて乗りました。ベトナム人はとても優しく、いろいろな果物を休みなく勧めてくれました。何か話しかけようかなとすると指さし会話帳を利用して自分の自己紹介をしたり、村の特産を教えてくれたり楽しく話をしてくれました。外で座っていても、どこかの知らない人がやって来ては、趣味は、名前はといろいろ聞いてくれました。ベトナム人の人の温かさには感動しました。

そして、青年海外協力隊の人の話を聞くこともありました。協力隊の人は、自分の好きなスポーツを教える人、医療に関わる人などベトナムに不足していることを援助したりしていて、ぼくも将来は世界の人の役に立つことを協力する仕事に就いてみたいなど感じるようになりました。

今回この体験事業に応募して本当に良かったと思います。はじめは慣れない習慣もあつたり、言葉でうまく伝えられなくて困ったりしたけれど、ベトナムという国は最高でした。

## ベトナムでの私の思い出

坂口 あゆみ

(祁答院中学校 3年)



今年の夏、母の勧めや好奇心でベトナムでの一週間のホームステイを体験してきました。初めての海外でたくさんの心配や不安があったのですが、その不安をベトナムの人たちの優しさが見事に消してくれました。私が一番心配していたことは言葉で、ベトナムに行っても通じるかととても不安でした。しかし、ベトナムの人も一生懸命私の言っていることを理解しようとしてくれたので、予想以上にたくさん言葉を交わし、思いを伝えることができました。表情やジェスチャーを使って伝えるのがほとんどで、それがとても楽しかったです。

私の泊まった家は新しかったので、そんなに日本の家と変わらなかったけど、他の家に泊まった友達やはりトイレとお風呂にかなり戸惑ったそうです。トイレもお風呂も外にあって、かなり古かったけど、それでも最後にはいつの間にか慣れていたようです。私もいろんな所を見学し、体験しました。すると、なんだか日本は贅沢なんだと思うようになりました。

一番最後の日に、青年海外協力隊の方々の話を聞きましたが、その中の栄養士さんの話にとっても興味を持ちました。ベトナムでは、貧困のため妊娠中でもバナナしか食べられない家があるそうです。病院の方でも、貧しいのが分かっているので、肉や魚を食べなさいと言えないそうです。また病院ですら病院食が出せなくて、栄養士さんはそこも改善したいと言っていました。日本では、中絶や育児放棄がありますが、母親の食事も苦しいのに、ベトナムでは今まで一度も子どもを捨てるといったことはありません。この話を聞いたとき、「やっぱりベトナムは、優しい、温かい国だ。それに比べ、日本は豊かな国のはずなのに…」ベトナムには、今の日本にないものがあるんだと深く思いました。

話をした協力隊員の人たちの中には、これから始めるという人もいて、不安や戸惑うこともあると言っていました。とても楽しそうに話していました。

一週間はとても短い期間でしたが、ホームステイ先との思い出や、いろんなことが学べたと思います。最初のときよりたいぶベトナム人に話かけられるようになったり、度胸もついたと思うし、ここで学んだいろいろなことを、これからも役立てていきたいです。この夏の一週間は、これからの私を変えていく大きな思い出になりました。



## 夢を見つけたベトナム

岩元 明子

(鹿児島純心女子高等学校 3年)



今まで曖昧だった私の夢。高校三年生になり、将来の夢に向かったの進路を考えなくてはならない時期になってきた。とりあえず、英語関係。なりたいモノは…。次々と変わっていく私の夢は、何か一つ「これだ!」というモノにはならなかった。いつも心に何かひっかかる。しかし、ベトナムに行かせてもらい、帰ってきた私の心は一つに固まっていた。夢は青年海外協力隊に入ること。いつも心に引っかかっていたものが、やっと分かった。小中高と教科書の片隅に載っていた青年海外協力隊の文字。それだった。実際、協力隊員の方たちの「言葉の壁など大変だが、やりがいがあり、後悔はしていない。」という言葉聞いたとき、私のバラバラだったモノが一つになっていた。その国の人と同じ生活をし、自分が持っているものを教える国際協力。やってみたい。誰の道でもない、私の道なのだから、決めるのは私自身だ。

ベトナムでの私の生活は、とにかく最高だった。ただ一つ困ったことは、家にトイレがなかったということだ。小はお風呂でして、小さな桶で水を汲み、流す。大は裏の畑でするらしかった。家族の絆は非

常に強く、日本でいう遠い親戚まで仲がいい。私にも気さくに話しかけてきてくれ、「何て温かいのだろう」と思った。夕食後の家族の団欒が私の楽しみで、家族が私に伝えようと話しかけてくれていることがよく分かった。ベトナムは多くの日本人が思っているほど悪くはない。むしろ、私にとっては馴染みやすく、過ごしやすかった。食べ物はおいしいし、美しい笑顔が毎日の生活にはあふれている。しかし、たしかに悲しい過去を持っている。

今でも忘れられない戦争博物館で見たもの。特に目に焼き付いているのは、変形した赤ちゃんのホルマリン漬け。枯葉剤を浴びた妊婦さんのお腹の中にいた赤ちゃんは、ベトナムドクちゃんのように体が繋がっていたり、頭が大きく変形していた。「本物です。」と通訳のヤンさんが言ったとき、何とも言えない悲しさと、背中に冷たいものを感じた。目を背けてはいけない。私は日本の家族や友達に伝えようと思い、シャッターを切った。昔のベトナム、そして今ここにあるベトナムを伝え、誤解を解こうと思った。ベトナムの人たちは、悲しい歴史を背負いながら、強く明るく前向きに生きている。ベトナムへ行って、私が得たものは、愛と夢だった。帰るときはもちろん寂しさもあったが、また必ず来ようという思いの方が強かった。今度行くときまでに、もっとベトナム語を勉強しようと思う。もし、ベトナムへ行ってなかったら、将来も見えてなかったし、ホストファミリーや友達にも出会えなかった。そして、あの温かさにも触れることはできなかった。

鹿児島県青少年国際協力体験事業に関わった方々、純心高校、そして私の家族に感謝します。

# 青少年国際協力体験事業に参加して

今村 圭佑

(溝辺中学校 2年)



7月20日、今日はベトナム出発日。空港でホームステイ先の写真をもらいました。

結団式では、ベトナム語で一人ずつあいさつをして機内へ乗り込みました。関西空港から六時間かけてベトナムホーチミン市へ着きました。機内では不安と期待で食欲もなく、眠れませんでした。その夜は、ホテルに泊まりました。朝食はホテルのレストランで食べました。みんな、食欲旺盛でした。

ホーチミン市から二時間かけて、Dong Nai(ドンナイ)省博物館へ行きました。着くと楽器の演奏でぼくたちを迎えてくれました。そのとき一緒に花束も渡され、すごい歓迎にびっくりしました。自己紹介の後、博物館を見学しました。ベトナム人の衣装や工芸品、昔から使われている道具などベトナムにも昔からの歴史があったということを知りました。

次にHuyen Huu Canh(グエン フー カン)寺を訪問しました。そこでは僕の相棒のラム君と線香をあげました。その後、昼食会でした。

昼食会の後すぐにバスに乗り、Bien Hoa(ビエンホア)市孤児院に向かいました。孤児院は親のいない子どもや、仕事で世話をできない親が子どもを預ける所で、たくさんの子供がいました。中学一年生で日本語や英語を話すことができる子もいました。その子は、もっと他の国の言葉を覚えたいと言

っていました。

いよいよ、ホストファミリーとの対面です。家に行ってすぐ果物をご馳走になりました。チョムチョム(ランブータン)、スイカ、ドリアンなどたくさん食べました。夜はラム君の親戚がたくさん集まって、話は十時まで続きました。

次の日は農作業でしたが、ラム君の家は歯医者さんで農作業はなくて、バイクの後ろに乗って村を見物しました。夕食はアヒルの揚げ料理でした。

次の日の戦争博物館で、一番ショックだったのが手足のない子どもがホルマリンの中に入っていることでした。枯葉剤のせいでこんな子どもが生まれたそうです。

チョーライ病院では300台のベッドがあるようですが患者があまりにも多く、一台に二人ずつ眠っていて不便そうでした。医療の設備は充実していました。その後の農作業では食用のハス畑に入り、手伝いをしました。SAC森林公園戦地ではたくさんの慰霊碑があり、戦争には良いことは一つもないと思いました。そこでのキャンプファイヤーでは、歌やダンスをベトナム人と日本人で発表しました。

協力隊員との懇談会では、ほとんどがスポーツ関係の隊員でした。協力隊員になるのに親に反対されてでも、外国に来て頑張っているそうです。その強い気持ちがすごいと思います。自分だけじゃなくて、他国を救おうとする気持ちが強くなければできないと思います。ぼくも今回の体験を活かして協力隊員になれるようにもっと勉強したいと思います。

ホストファミリーはとてもやさしい家族でした。ありがとうございました。

## 第10回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて

団長 弓場 秋信

鹿児島空港での結団式で、13名の団員が2回の事前研修で学んだベトナム語で自己紹介と抱負を聞きながら、団員の参加動機が頭を過ぎった。「将来の進路のヒントを得たい」、「協力隊員の活動を自分の目で見てみたい」、「異文化体験をしたい」、「ベトナムの食物や衣服について知りたい」、「何かに挑戦したい」等。それぞれの団員にとって意義のある貴重な1週間となるよう、団長として同行者と協力しながら精一杯の努力をする事を自分に課しベトナムへと向かった。

ホームステイ先のあるドンナイ省は、ホーチミン市の東70kmに位置し、農業を中心とする人口210万人の省である。ドンナイ省が外国人のホームステイを受け入れるのは初めてと聞いていたので、一抹の不安を持って省都ビエンホアの博物館前に着いたが、大勢の人々、ブラスバンドそして報道陣の出迎えを受け、歓迎式に臨む頃には不安も一掃された。それは私共の受け入れをドンナイ省人民委員会（日本の県庁に相当）が受け入れ窓口となり、ニョンチャック郡や共産党青年同盟が、全面的に支援をする運びになっていたからである。

歓迎式で、これから4泊5日団員が世話になるホームステイ先の青年と対面し、博物館の見学、寺院訪問、ローズガーデンでの人民委員会主催の交流会、ビエンホア市孤児院での交歓会と、一緒に行動する中でベトナム語の練習をしながらお互いに打ち解け、人口約7,000人のホームステイ先フーホイ村に到着した。期待と不安が交差する複雑な表情を見せる団員は、ホストファミリー出迎えのオートバイに乗りそれぞれの家に向かった。

1日ホストファミリーとゆっくり過ごした団員は、次の日から国際協力の現場チョーライ病院訪問、ベトナム戦争記念館の見学、ニョンチャック中・高校での文化・スポーツ交流、マングローブ林での学習、ベトナム戦争戦没者寺院での献花・植樹、そしてニョンチャック郡主催の交流会・キャンプファイヤーと、研修と交流を行った。最後の朝、青年同盟の団員、ホームステイ先の家族そして村民に、再び会える日がくる事を願いつつ涙のお別れをして、忘れがたいフーホイ村を後にした。

青年海外協力隊員の活動現場ホーチミン市総合科学図書館を訪問し、実際の隊員活動の一端に触れた後、ベトナム中部の都市フエで活動している鹿屋市出身の山下隊員やホーチミン近郊で活動中の10名の隊員との懇談会を行った。言葉や社会体制の壁、生活環境・文化の違いを乗り越え輝いている隊員の報告は、団員に多くの言葉を残すとともに感動を与えた。

13名の団員は、4泊5日のホームステイや国際協力の現場訪問を始めとする様々なプログラムに、言葉のハンディや生活環境の違いをもろともせず、全ての時間・場所で積極的に取り組み、多くの事を吸収して帰国した。この報告書が多くの皆様や学校で読まれる事を熱望しますと同時に、13名の団員の将来に大いに期待します。

## 同行者一口メモ



青年海外協力隊 OG

丸野 里美

以前からこの体験事業のことは知っていたが、まさか自分が同行者になるとは思っていなかったの、初心者として参加した。

県内あちこちから集まった13人の団員たち。それぞれかなり個性的で年齢もばらばらの13人が、この一週間をどう過ごすのか大変楽しみでもあり、正直なところ「この子は本当に大丈夫かな。」と心配な点もあった。しかし、蓋を開けてみればこの団員たちからもらったものは大きい。

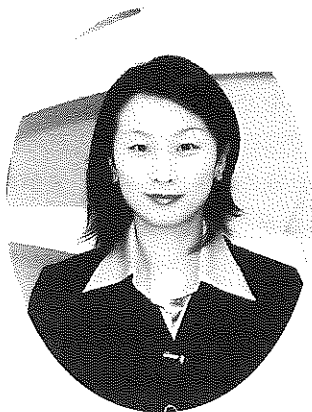
まず、なんと言っても新鮮な驚き。お隣のカンボジアが派遣国で、ベトナムにも来た事があり、つい慣れてしまっている私のアンテナを再び広げてもらった気がした。ホーチミン市でも村でも、どこへ行っても彼らが疲れて眠っていない限り一緒に驚いたり考えたり。

最後に団員から分けてもらったのが、感動。最後の夜のキャンプファイア一での出し物は、どれも目頭が熱くなった。ゲームでの弓場団長と浜崎事務局局長のアヒルおどりもさることながら、13人の団員たちの真剣さに胸を打たれた。それはベトナムで過ごすうちに真剣さが増し、時間を見つけては練習

し協力して準備した。自分達が受けた訪問先での心からの歓迎に答えようとしたのだと思う。

もうひとつの感動は、別れの日。村を出る朝の子ども達のぼろぼろの涙。結構ずばずばと、そしてクールに本音で話せる団員たちはそんなテレビ番組のようにはならないと思いきや、本当にぼろぼろ。きっといろいろな想いが混じる涙。中でも大きいのは、ホームステイ先の家庭で、慣れない環境で片言の言葉でも、本当の家族のように愛されたということの実感ではないかと私は思う。そしてそれは、国際交流というより、人間交流。

さて、これからこの団員たちの家庭でも学校でも、ベトナムでできたようにアンテナを広げて、自分の気持ちを本当に素直に表現できるといいなあ。それは私自身の課題でもある。



MBC ニュースキャスター

竹村 志麻

今回の、ベトナム滞在は、私にとって初めての、カメラ。しかも、ホームステイをしながらの取材という、緊張と不安に満ちたものでした。

しかし、案ずるより生むが易しとは、まさにこのこと。あっという間に終わってしまった感があります。ただ、何度、通訳の方に説明してもらっても、ホームステイ先の家族に、「取材」ということが理解していただけず、さびしい思いをさせたり、取材に出たいのに出られなかったりということもありましたが・・・

それにしても、子供たちの適応能力の高さには、驚かされました。正直いって、出発するまでは、大丈夫かなと思っていましたが、あっという間に村に溶け込み、言葉も通じず、日本の生活からすれば、不便なはずの生活にも、すぐ慣れたようです。あんなに、いろんな意味でたくましいとは思ってもみませんでした。

そして協力隊員との交流。活発な質問がたくさんで、自分が高校生時代に、ここまで、しっかりしていたかな、自分のことだけでなく、世界のことまで、こんなに考えていただろうかと考えさせられました。みんなが5年後、10年後にどんな活躍を

しているのか、本当に楽しみです。

鹿児島に帰ってきて、さっそく、ニューズナウでベトナムでの様子を紹介しましたが、編集をしながら、最後の別れのシーンでは、思わずもらい泣きをしてしまいそうになりました。取材をしているときは夢中だったので、あらためて映像を見て、色々と感じることができました。本当に、私自身、すこしたくましくなれたかなと思っています。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



青年海外協力隊 OG

### 川崎 久美

青年海外協力隊隊員として2年間の活動を終え、ケニアから帰国してちょうど1年。職場復帰し、日常の生活に流されていた私にとって、皆さんと過ごしたベトナム7日間はとっっても刺激的でした。そして、皆さんから多くの事を学び、いっぱい元気をもらいました。

正直に言いましょ。研修ではじめて皆さんに会ったときの印象は「今時の若者だなあ」「ベトナムでホームステイなんてできるのかな」でした（ごめんね）。しかし、宿泊研修の時「おやっ。彼らならやるかも」に変わっていきました。そんなこと言うなら、皆さんだって「川崎さんって、頼りになるのかなあ」って思ったでしょうね。

みなさん、気付きましたか？この8日間で1人1人本当に変わりましたよ。「何が変わったか」具体的には表現しづらいけど、たくましくなった。そして、笑顔が素敵になった。何よりも私が皆さんに驚かされたのは感受性の強さです。ベトナム戦争記念館で「人間が恐くなった」と涙を流す姿に、ホームステイの村で「こんな小さな子が、車道側を歩く気配りをしてくれるんですよ」という言葉に、「人生観なんて、そんなに簡単に変わらないんですね」という気づきに、脱帽。ベトナムの人々と素直に真正面から向き合い、多くの事を吸収していく皆さんをみて、うらやましくも感じました。今の生活に甘んじていた私でしたが、私も「今、出来る何か」を探してみたいと思います。

そして、私からのお願いです。皆さん、今回ベトナムで感じた事、気付いた事を忘れないで下さい。そして、今の感性や視野を大切に、もっともっと育てていって下さい。

今回、第10回を迎えたこの事業が20回目を迎えるとき、もしかしたら、皆さんの協力活動現場を鹿児島の後輩達が体験していたら素敵だなあ、と空想する私です。

PS：これが本当に最後のお願いです。「パスポート事件」「ニョクナム事件」（私が勝手にそう名付けました）は、皆さんの記憶から抹消して下さい。



南日本新聞社 地域報道部記者

### 友岡 政信

家を取り囲む木々。開け放たれた窓。降り注ぐ日差しにいぶされた土煙のにおい。幼いころ、夏になるたびに訪れた、祖父母の家の記憶がよみがえる。気候や風景に違いはあれど、日本からの生徒たちとともに過ごしたフーホイ村での生活は、忘れていた「夏休み」を取り戻させてくれた。

カメラを片手にメモを取り、目にした印象的なものをできるだけたくさん、できるだけ綿密に記録しようと思った。立場はあくまで同行者、記録者だと肝に銘じていたつもりだった。しかし、青年団からもらった緑の帽子をかぶり、米から作った焼酎を胃に流し込み、生徒と一緒に汗をかきながらあぜ道を歩くにつれ、頭と体が分離する。「えーい、なんとかなるさ」。いつしか、自分が記者だと忘れてしまい、ゆったりとした気分で過ごす時間が長くなっていた。

同行した生徒さんほどのしなやかな感性は自分の中にはもうないだろう。七日間での彼らの成長ぶりを見ると痛切に感じる。しかし、彼らより十数年だけ長く経験を積んだ自分にも、それなりの刺激はあった。三十路を迎え初めての海外。それもベトナムの農村。やっと少し「大人」になれたのかな、と鹿児島という狭い常識になじんだ気になっていた自分に、まだ見ぬ世界があることを教えてくれた。

ホーチミンの土産物屋で「ニセモノダヨ」と言われながら買った、オイルライターでタバコに火をつける度、ベトナムでの日々は、幼いころの祖父母の家の記憶と重なりながら、遠い世界になりつつあることを感じる。ただ、フーホイ村で感じた、驚きや温かさ。これらのものを少しでも、今後の自分の仕事や人生の糧として生かしていければ、と思っている。

ホストファミリーの家を訪ねてくる人は皆バイクでやってくる。朝がまだ明けきらないうちからバイクの音が響く。ホストファミリーの娘も、朝5時にバイクでホーチミンの大学へ出かけていく。

村を貫く幹線道路を眺めていても飽きない。ひっきりなしにバイクが走ってくる。老若男女、みんなバイクを運転している。中には、バイクの運転者の肩に手を置いてバイクと一緒に走っている自転車もいる。いろいろなものをバイクに積んで走っている。後ろからでは、バイクの姿がまったく見えないほどたくさんものを積んだバイク、よくもバランスよく積めるものだと感心する。重量物を足元に乗せ積み、荷台にも大きなダンボール箱を積んだバイク。子供を前に、荷台には奥さんと子供を乗せて走っているファミリーカーのバイク。

ホーチミン市の大通りはバイクの洪水である。バスの中から眺めたが、相当の迫力がある。ベトナムに着いて、最初に感激したのがこの洪水であった。手を振ると、人懐こく手を振ってくれる人の距離の近さ、愛らしさにも感激した。

村の中の狭い小道もバイクで器用に走っている。村の中は、幹線を除けば、ほとんどが幅1メートル程度の舗装されていない小道である。伸びている小枝に、顔を打たれたりする。脇には雑草の茂る小川が流れている。小川に架かる橋はバイクがやっと通れるほどの幅しかない。

このバイク社会が、日本のような車社会に進化するのだろうか。日本では、すべての人家には車が入れるとあってよい。ベトナムの村の中の曲がりくねった幅の狭い小道が、みんな車の通れる道になるのだろうか。脇を流れている小川はどうなるだろうか。

ベトナムには、日本が失ったものが残っている。団員たちは、それを、敏感に感じ取った。彼らが、生まれたときには、既に日本では、なくなっていたあるいは薄くなっていたはずのものであるのに。

経済的な発展と日本が失ったもの、人間関係の濃さや自然。私は、「You can not eat your cake and have it.」は、真実だと思う。だから、団員たちがつくる21世紀の地球とベトナムを楽しみにしたい。



# Đoàn học sinh tỉnh Kagoshima (Nhật) đến Đồng Nai

## BAO TANG ĐỒNG NAI



Đoàn HSSV Nhật Bản chụp hình lưu niệm phía trước Bảo tàng ĐN.  
(Ảnh : VĂN CÓN)

(ĐN) - Sáng ngày 21/07/2001, đoàn học sinh tỉnh nguyên tỉnh Kagoshima – Nhật Bản, gồm 21 thành viên đã đến thăm và giao lưu với học sinh - sinh viên tỉnh Đồng Nai tại TP. Biên Hòa và huyện Nhơn Trạch. Ông Huỳnh Văn Tới, phó chủ tịch UBND tỉnh đã đến thăm và tặng quà cho các thành viên của đoàn.

Đoàn lưu lại Đồng Nai trong 4 ngày ( 21- 24/07/2001). Ngày đầu tiên ở thành phố Biên Hòa, đoàn được hướng dẫn đi tham quan Bảo tàng Đồng Nai, đến thăm và tặng quà cho các em ở Trung tâm huấn nghệ và bảo trợ cô nhi và đoàn cũng đã đến dâng hương và tham quan đền thờ

(Xem tiếp trang 10)

**KIM LIÊU**

Xe năng lượng mặt trời Việt Nam sang Úc:

## Đã có vé máy bay !

Ngay sau bài viết *Xe năng lượng mặt trời Việt Nam sang Úc* (Bao Thanh Niên số 166) phản ánh việc... thiếu tiền mua vé máy bay để sang Úc dự thi của hai bạn Bùi Thanh Nam và Lê Đăng Khôi, nhiều đơn vị, cá nhân đã bay tỏ sự quan tâm, ý định giúp đỡ hai bạn. Đặc biệt, một độc giả (giấu tên) đã giúp toàn bộ số tiền 1.800 USD để mua vé máy bay cho hai nhà sáng tạo trẻ. Bao Thanh Niên chân thành cảm ơn sự quan tâm kịp thời của các độc giả hảo tâm và xin chúc chuyến đi của Nam và Khôi gặt hái nhiều thành công !

T.T

↑

【平成 13 年 7 月 24 日 DONG NAI 新聞】

←

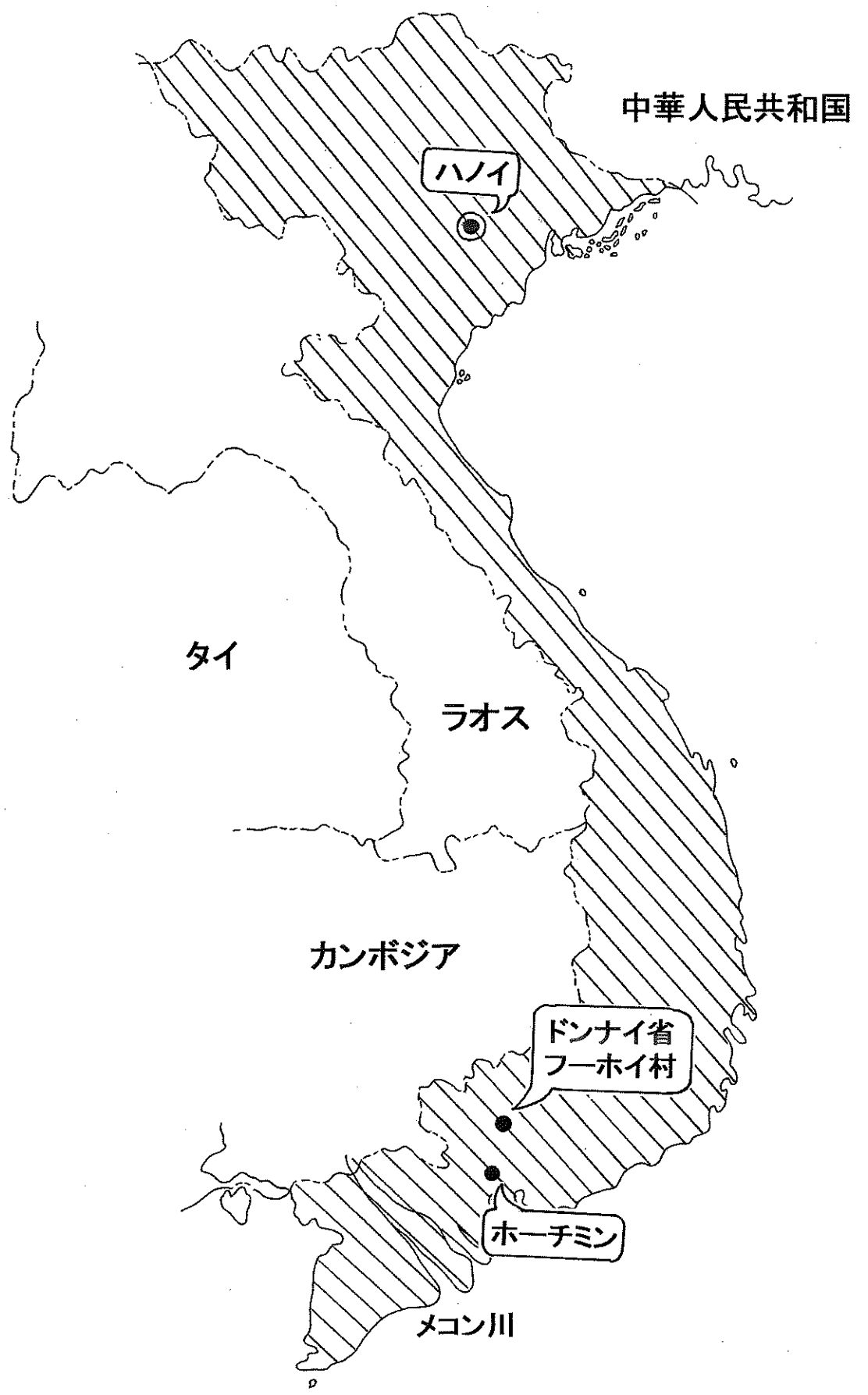
【平成 13 年 7 月 24 日 THANG NIEN 新聞】



Đoàn học sinh, sinh viên Việt - Nhật tại Bảo tàng tỉnh Đồng Nai

Nằm trong chương trình giao lưu văn hóa Việt - Nhật, từ ngày 21-25.7.2001, Tỉnh Đoàn Đồng Nai tổ chức các hoạt động giao lưu văn hóa với 24 học sinh, sinh viên tỉnh Kagoshima (Nhật). Trong thời gian này, các học sinh, sinh viên Việt - Nhật sẽ được tham quan đền thờ Nguyễn Hữu Cảnh, Bảo tàng Đồng Nai, giao lưu với trẻ em Trung tâm Huấn nghệ cô nhi... Sau đó, các bạn sẽ được đưa về ở với dân tại huyện Nhơn Trạch (Đồng Nai) để tìm hiểu lối sống, phong tục tập quán của người dân ở đây. Ngoài ra, trong chương trình "Homestay" còn có các hoạt động thăm ruộng rẫy, dạy tiếng Việt - Nhật, tham quan chiến khu Rừng Sác, viếng tượng đài Chiến sĩ đăc công Rừng Sác... (Tín, ảnh: Thiên Long)

ベトナム概略図



## 事業概要

### (事業の趣旨)

鹿児島県の青少年を発展途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。また、派遣後はこれらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し、地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

### (事業主体)

- 主 催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会  
＜構成団体＞  
青年海外協力隊鹿児島県OB会  
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会  
財団法人 鹿児島県国際交流協会
- 共 催 鹿児島市，出水市，加世田市，国分市，垂水市，祁答院町，溝辺町
- 後 援 国際協力事業団九州国際センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会
- 協 力 ベトナム大使館
- 組 織
- |       |       |                         |
|-------|-------|-------------------------|
| 会 長   | 安楽 大  | (青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)      |
| 副 会 長 | 富迫 輝男 | (鹿児島県国際交流協会専務理事)        |
| 事務局長  | 浜崎 研  | (鹿児島県国際交流協会事務局長)        |
| 監 事   | 弓場 秋信 | (鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長) |

# 訪問団員名簿

## ●訪問団員(青少年) 13名

番号	氏名	性別	学校名	学年	推薦自治体
1	ヒラノ アヤ 平尾 彩	女	鹿児島高等学校	3年	鹿児島市
2	タケノコ コウコ 為藤 弘子	女	武岡台高等学校	2年	鹿児島市
3	ツルソエ ヒデユキ 水流添 秀行	男	鹿児島玉龍高等学校	1年	鹿児島市
4	シロイリ サトミ 塩入 里美	女	出水高等学校	3年	出水市
5	ナガノ カナコ 永冢 可奈子	女	出水高等学校	2年	出水市
6	ヤマノウチ マコエ 山之内 真恵	女	出水高等学校	1年	出水市
7	ウエノ エリ 上野 絵莉	女	加世田常潤高等学校	2年	加世田市
8	キノ サキ 菊野 咲	女	国分南中学校	2年	国分市
9	マエダ マサキ 前田 正輝	男	鹿屋農業高等学校	1年	垂水市
10	チマ トモヤ 千竈 智也	男	祁答院中学校	3年	祁答院町
11	サカグチ アユミ 坂口 あゆみ	女	祁答院中学校	3年	祁答院町
12	イシワタ ナツミ 岩元 明子	女	鹿児島純心女子高等学校	3年	溝辺町
13	イムラ ケイタ 今村 圭佑	男	溝辺中学校	2年	溝辺町

## ●同行者 6名

1	ユバ アキノブ 弓場 秋信	男	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長	団長
2	ハマサキ ケン 浜崎 研	男	(財)鹿児島県国際交流協会 事務局長	
3	カサキ クミ 川崎 久美	女	青年海外協力隊OG(ケニア 看護婦)	
4	マルノ サトミ 丸野 里美	女	青年海外協力隊OG(カンボジア 小学校教師)	
5	タケムラ シマ 竹村 志麻	女	(株)南日本放送 ニュースキャスター	
6	トモガキ マサノブ 友岡 政信	男	(株)南日本新聞社 地域報道部記者	

## 訪 問 日 程

●派遣国:ベトナム(訪問地-ホーチミン市, ドンナイ省)

●期 間:7月20日(金)~7月26日(木)

●ホームステイ先:ドンナイ省フーホイ村

●スケジュール

日時	時間	内 容	宿泊
7月20日 (金)	7:00	結団式@鹿児島空港国内線ターミナル3階A室	ホテル
	8:00	鹿児島空港発(NH822)	
	9:05	関西空港着	
	11:15	関西空港発(VN941)	
	15:20	ホーチミン市 Tan Son Nhat空港着	
7月21日 (土)	7:10	ホテル出発	ホームステイ
	9:00	歓迎セレモニー	
	10:00	Dong Nai省博物館見学	
	11:00	Nguen Huu Canh寺訪問	
	12:00	Rose Garden内釣堀で魚釣り	
	12:30	昼食会(人民委員会、議会関係者)	
	14:30	Bien Hoa市孤児院見学	
	16:00	Bien Hoa市工場団地見学	
18:30	ホストファミリーとの対面式		
7月22日 (日)		ホストファミリーと農作業など	ホームステイ
7月23日 (月)	7:00	Phu Hoi村人民委員会に集合	ホームステイ
	9:30	戦争博物館見学	
	10:30	チョーライ病院訪問	
	14:00	伊藤企画調査員からJICA事業等の説明	
7月24日 (火)	7:30	Phu Hoi村人民委員会集合	ホームステイ
	8:30	Nhon Trach高校訪問 文化・スポーツ交流(歌・舞踊・バレーボール)	
	10:30	メコン川支流クルーズ・えび養殖場見学	
	15:30	SAC森林公園内戦地訪問 記念植樹	
	16:30	Nhon Trach 人民委員会歓迎会	
	17:30	キャンプファイヤー	
	22:00	ホストファミリーの家に戻る	
7月25日 (水)	7:00	ホストファミリーとのお別れ	機内泊
	10:00	ホーチミン市総合科学図書館訪問 * 寺西順子青年海外協力隊員(システムエンジニア)を訪問	
	18:00	青年海外協力隊員との懇談会(鹿児島出身山下隊員他10名)	
	19:00	青年海外協力隊員との夕食会	
	23:25	ホーチミン市 Tan Son Nhat空港発	
7月26日 (木)	6:15	関西空港着	
	9:50	伊丹空港発(ANA763)	
	10:50	鹿児島空港着, 解団式	

---

Hen Gap Lai Xa PHU HOI  
第10回（平成13年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

編集発行 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0842

鹿児島市東千石町1番38号鹿児島商工会議所ビル11階

TEL099-225-3279

FAX099-225-3284

平成13年9月

---